

テクノロジーとアートが融合する新しい表現を支援 「日本電通メディアアート支援寄金」創設

日本電通株式会社(本社：大阪市港区)は、2017年に創業70周年を記念して、同年、アーツサポート関西に「日本電通メディアアート支援寄金」を創設し、関西のメディアアートを支援することとなりました。

日本電通は1947年に大阪市阿倍野区で創業し、情報通信インフラの整備や情報処理サービスの提供などを行っています。同社は寄金の創設によって、自社の事業と深くかわる情報通信技術をクリエイティブな視点で表現するアートの可能性に注目。その拡大や新たな展開を目指します。2017年度から5年間にわたり総額300万円の助成を予定しており、2018年度は100万円を助成。支援対象はメディアアート作品の制作活動で、新たな価値観やイノベーションの萌芽を予感させる作品づくりをサポートします。

今年3月20日、グランフロント大阪において、同社代表取締役会長兼社長の上敏郎氏やアーツサポート関西運営委員の山本雅弘氏(毎日放送相談役最高顧問)らにより、寄金創設の記者発表が行われました。上会長は、「毎日

放送の山本相談役からASKの取り組みを聞いて素晴らしいと思った。IT関連のさまざまなサービスを提供している当社はクリエイティビティやイノベーションが大事だと考えており、その意味で技術とアートが



日本電通株式会社社長兼社長・上敏郎氏

出会う新しい表現の支援にチャレンジしてみようと思った」と寄金創設の動機を話しました。メディアアートに関わるアーティストを支援することは、長い歴史に培われた関西の文化に新たな息吹を与えるとともに、未来に向けた文化の継承にもつながると期待されます。

メディアアート…テレビやビデオ、コンピュータなどの情報通信技術を使った新しい美術表現。

スペシャルトークイベント

「メディアアートの今とこれから」

2018年3月20日／グランフロント大阪北館・The lab.

アーツサポート関西は、「日本電通メディアアート支援寄金」の創設に伴い、ナレッジキャピタル(グランフロント大阪内)に拠点を置くVisLab Osakaと連携し、メディアアートの支援プロジェクトに取り組んでいます。そのキックオフとして、アートプロデューサーの原久子氏(大阪電気通信大学総合情報学部教授)を進行役に、数々のナンセンスマシンの開発で知られる芸術ユニット「明和電機」の土佐信道氏と、ヒューマン・インターフェイスやバーチャル・リアリティの研究者である安藤英由樹氏(大阪大学大学院情報科学研究科准教授)の3人によるトークイベントを開催しました。

土佐氏は、ゴム製の人工声帯を空気で震わせて人間の笑い声に似せた音を出す「ワッハゴーゴー」などの開発経緯や、それらのマスプロモーション(ライブパフォーマンス)について紹介。また、マスプロダクション(商品化して販売するもの)として、音符の形をした電子楽器「オタマトーン」や魚の骨の形をした電気の延長コード「魚(ナ)コード」などの開発経緯や市場での反応などを紹介しました。そうした活動のなかで土佐氏は、絵を描いたりコンピュータを使って頭でイ

主催：アーツサポート関西

共催：VisLab Osaka(ビズラボ オオサカ)

協力：日本電通株式会社、一般社団法人ナレッジキャピタル

メージした得体の知れないモノを形にしていくこともメディアアートであると指摘しました。

安藤氏は、自身の研究成果について多くの人に関心をもってもらうために、満員電車を疑似体験するシステムを開発したり、三半規管に微弱な電流を流して平衡感覚を制御したりすることで、あたかも念力で相手を動かしているようなデモンストレーションなどについて紹介。そうした活動もメディアアートの一種であるとし、今後はそうした技術の体験を軸として、well-being(人々の心の豊かさや幸せ)につなげていきたいと語りました。

原氏は、「お二人の話聞いて、興味深い表現方法を使って技術を知ってもらおうとする発想も重要なのだが、その背景に日々のさまざまな研究や試行錯誤の積み重ねがあることを実感した」と語りました。



原久子氏



土佐信道氏



安藤英由樹氏

丸一鋼管が「ワンコイン文楽」支援の“バトン”を継承

大阪発祥でユネスコ世界無形文化遺産でもある人形浄瑠璃文楽。その楽しさを若い世代に伝え、伝統を受け継いでいく「ワンコイン文楽」(NPO法人 人形浄瑠璃文楽座 主催)を支援するため、丸一鋼管株式会社(本社：大阪市西区)がASKに「丸一鋼管 文楽支援寄金」を創設しました。ワンコイン文楽への支援はASKの支援第1号として2014年度にスタート。これまで京阪神ビルディング株式会社(2014～15年度)、岩谷産業株式会社(2016～17年度)が支援した4年間で延べ2,000人を超える若者がこの取り組みを通して国立文楽劇場で文楽を鑑賞し、大きな反響を呼びました。丸一鋼管は3代目の支援者となり、近畿圏在学・在勤・在住の30歳以下を対象とする「そうだ、文楽に行こう!ワンコインで文楽U-30」に対して、2018～19年度の2年間で500万円を助成します。

4月23日、国立文楽劇場において寄金創設の記者発表が行われ、同社代表取締役兼CEOの鈴木博之氏は、「地域に根ざした企業活動をモットーとする当社にとって、関西・大阪発のエンターテインメントである文楽への支援ができるのは、地域への恩返しでもあり光栄なこと。私自身、文楽太夫の竹本源大夫さん(人間国宝・2015年没)と懇意にさせていただいた縁で20年来小唄を習っており、伝統芸能



鈴木博之氏から人形浄瑠璃文楽座へ助成金の目録を贈呈。
左から鈴木博之氏、有栖川有栖氏、竹澤團七氏、吉田玉助氏
(記者発表にて)

の支援に携われるのはうれしい」と語りました。

また、記者発表には人形浄瑠璃文楽座理事長で三味線奏者の竹澤團七氏、同理事で人形遣いの吉田玉助氏、作家で大の文楽ファンの有栖川有栖氏らも同席。有栖川氏は、「30代の頃、大阪で物書きをしていて文楽を知らないというのは恥ずかしいと思った。何度か観るうちにその面白さに引き込まれ、文楽ファンを増やそうと会う人ごとに文楽の魅力を語って聞かせてきたが、私一人ではあまりに微力だった。そんな折、ワンコイン文楽やその支援者がいると知り、まさに渡りに舟のような思い」と笑顔で語りました。

ワンコイン文楽…近畿圏の若者をワンコイン(500円)で国立文楽劇場に招待し、公演前に技芸員が見どころ解説を行うなど、文楽の魅力により深く触れてもらう企画。

寺田千代乃 上方落語若手噺家支援寄金 第4回上方落語 若手噺家グランプリ2018 決勝戦

桂ちょうばさんと桂三度さんが同点優勝

上方落語の継承と若手噺家の育成を目的として、アートコーポレーション株式会社の寺田千代乃社長の寄付で創設された「寺田千代乃 上方落語若手噺家支援寄金」(500万円)から、毎年、ASKは若手噺家グランプリを支援しています。その4回目の決勝戦が今年6月19日、天満天神繁昌亭(大阪市北区)で行われ、審査の結果、桂ちょうばさんと桂三度さんの二人が同点で優勝しました。

今回は、入門4～18年の若手噺家40人がエントリーし、4回の予選を勝ち抜いた9人による決勝戦となりました。審査を行うのは在阪のテレビ・ラジオ局のプロデューサーやディレクターの7人。持ち時間の11～13分を1秒でも足りなかったり超えたりすると、いくら大ウケしたとしても大幅な減点が課せられます。そうした厳しい条件をクリアした出演者たちのレベルは非常に高く、前売りチケットも即日完売するほどの人気企画となっています。

死んで地獄へ行った男が地獄で物見遊山を楽しむ『地獄めぐり』で大いに沸かせた桂ちょうばさんは、終演後に受賞の喜びを聞かれて「(入門18年目までという)キャリア制限の最後のチャンスだったのでとてもうれしい。最新

の時事ネタを入れるために、本番直前まで必死で考えた」とホッとしたようす。また、コンビニへ強盗に入ったら店長や客たちが強盗以上に変人ばかりで大混乱に発展する新作落語『心と心』を好演した桂三度さんは、「予選で出演者の噺を聴いて、なんとレベルの高い戦いかと不安になったが、とにかく多くの笑いを取ろうと考えて新作でチャレンジした」と笑顔で語りました。優勝した二人には、寺田千代乃氏からそれぞれ賞金20万円と記念盾が贈られました。



受賞の喜びを語る桂ちょうばさん(左)と桂三度さん(右)
(終演後の天満天神繁昌亭にて)